

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	安山 秀盛
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">英語の読解訓練における読み方が聴解成績に及ぼす影響 —大学生の必修英語を通じた実践研究—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="padding-left: 40px;">主 査 教授 森田 愛子</p> <p style="padding-left: 40px;">審査委員 教授 中條 和光</p> <p style="padding-left: 40px;">審査委員 教授 湯澤 正通</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、大学生の英語学習において、読解訓練が聴解成績を高めるか、訓練時の読み方が聴解成績に影響するかを検証した実践研究である。本論文は以下の6章から構成される。</p> <p>第1章では、大学の英語教育において聴解力向上のニーズが大きいこと、それに比して汎用性の高い指導方法が確立されていないという現状をふまえ、聴解力と読解力に共通要因があることから、読解訓練が聴解力を向上させる可能性があることを指摘している。また、読解時の読み方について、黙読・音読・つぶやき読みではプロセスが異なるため、それらを比較することで、読解訓練のどのような要素が聴解力向上に貢献するかを検討することができることを述べている。これらのことから本論文では、読解訓練が聴解力を向上させるか、訓練時の読み方によって訓練効果が異なるか、さらに学習者のもともとの聴解力によって訓練効果が異なるかの検証を試みる実践研究を行っている。なお、本研究においては、大学英語教育の現状に沿って、TOEICの聴解力測定法による聴解成績を、聴解力の指標としている。</p> <p>第2章では、読解訓練が聴解力を向上させ得ることを確認するため、まず、黙読による読解訓練と聴解訓練を行い、どちらが聴解力を向上させるかを検討している（研究1）。実験計画は、訓練法（黙読・聴解・統制）×聴解力（高・低）×時点（プレ・ポスト）の3要因計画であった。大学生の参加者130名が、6週間、毎週10分ずつの訓練に参加した。読解群と聴解群では、同一の読解材料を用い、黙読させるか音源を聴かせるかが異なっていた。統制群は訓練を行わなかった。訓練前後に、TOEICの測定法に従って聴解力を測定した。なお、訓練前のプレテストの成績で、参加者を聴解力高群・低群に分類した。訓練の結果、黙読群と聴解群の聴解力は向上した。しかも、訓練後のポストテストにおいて、黙読群の成績は聴解群より高かった。ただし、聴解力の高い学習者の場合は、聴解群の成績が最も高かった。したがって、もともと聴解力の高い学習者にとっては聴解訓練がより有効であるものの、全体的には黙読訓練が聴解訓練よりも聴解力向上に有効であることが</p>			

実証された。

第3章では、大学生87名を対象として実験を実施し、黙読訓練と音読訓練の効果を比較した(研究2)。実験計画、方法については、統制群を設けなかったこと、訓練期間が10週間であったこと、訓練前後のテスト内容が同一であったこと以外は、研究1と同様であった。実験の結果、黙読・音読のいずれの訓練によっても聴解力が向上すること、効果の大きさには違いがみられないことが明らかになった。黙読は発話に伴う負荷がかからず、文の意味を理解しながら読んだり、多く読んだりすることが可能である一方で、音読では音声情報のフィードバックや構音運動を伴うなど、音声情報の処理を明確に行っており、音声情報の理解につながりやすいというそれぞれのメリットが存在することが推測された。

第4章では、大学生119名を対象として実験を実施し、黙読訓練とつぶやき読み訓練の効果を比較した(研究3)。つぶやき読みは、他者に聞かせる必要のない小さな声での発声を伴う読み方である。音声化に伴う負荷が小さく、構音運動の利点を生かすことができるため、聴解力向上に有効であると予測された。実験計画、方法については、研究1と同様であった。実験の結果、黙読・つぶやき読みのいずれの訓練によっても聴解力が向上すること、ただし、聴解力の低い学習者の場合は、黙読群の成績がつぶやき読み群より高いことが明らかになった。研究1から3のすべてにおいて、黙読訓練が有効であることが示唆された。

第5章では、音声化を伴わない黙読訓練の有効性の背景を探るため、語彙量の増大に焦点を当て、語彙量と聴解力の関連を検討している。大学生92名を対象として、黙読群と統制群のみを設け、研究1-3と同様に実験を実施した。訓練前後には、聴解力測定とともに語彙量の測定を実施した。その結果、語彙量の伸びと聴解力の伸びには関連が認められ、語彙量の増大が聴解力向上に寄与している可能性が示唆された。

第6章では、第5章までの研究成果をまとめ、第1章で紹介した聴解力と読解力の共通要因をふまえて考察を行っている。本研究は実践研究であり、般化可能性を高めるためにさらに検討を重ねる必要があること、音の認識困難に読解訓練が効果を及ぼすかを検証する必要があることも指摘された。

本論文は、次の3点で高く評価できる。第1に、これまで十分に実証されていなかった聴解力向上に対する英語の読解訓練の有効性を実証し、複数の実験で再現性を検証した。第2に、複数の読み方による読解訓練の効果を比較し、学習者がもともと有する聴解力によって有効な訓練法が異なることを明らかにした。第3に、黙読を用いた一般的な訓練によって聴解力を向上させ得るという、大学入門期などに有用な知見を呈示した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(心理学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和5年 7月28日